

マイクロクレデンシャルと オープンバッジによる継続学習への効果

川原 洋¹

1. 概要

2024年度よりサイバー大学は従来の学位プログラムをコース・プログラム制（CP）の履修科目体系を維持しながら、マイクロクレデンシャル制（MC）へ全面的に移行した。MCの狙いは、卒業研究科目に至る体系的な専門分野の学力向上にある。さらに全く異なる他の専門分野、あるいは網羅的な同分野の学習意欲も助長するという、専門教育における専門性と多様性の両立である。MCの運用は開始からまだ2年経たところではあるが、MCの制度的効果が、一般および本学卒業生の再入学による科目履修を目的とする学習者数の著しい増加という形で現れ始めている。

本稿では、これらの学位の取得にとらわれない一般科目等履修生と卒業生による継続的学習のインセンティブと、これを助成するキャリア形成を目指す高等教育のあり方を提言する。

2. サイバー大学のマイクロクレデンシャルによる教育目的

2.1. 学習者主体の専門性の強化と多様性の両立

サイバー大学がMCを導入した第一の目的は、この学習者主体の専門性強化と多様性の両立である。これは、伝統的な大学教育における「専攻（Major）」と「副専攻（Minor）」のアナロジーを、デジタル時代の柔軟な単位構成によって再定義する試みである。

従来の学位プログラムでは、学生は入学時に選択した学科やコースの枠組みに縛られがちであり、卒業に必要な単位を揃えることが目的化する懸念があった。しかしMC制では、卒業単位修得に至る科目履修体系を細分化・テーマ別にクラスター化することで、学生は自らの主専攻（Platinum バッジを目指す経路）を維持しながら、並行して他の学修分野の上位MC（Gold バッジ）を獲得することを「副専攻」として定義できる。この仕組みにより、例えば「AIエンジニア」を目指す学生が、同時に「デジタルマーケティング

¹ サイバー大学 学長

グ」や「経営管理」の体系的な知識を証明可能な形で修得することができる。

2.2. オープンバッジの獲得欲を学修インセンティブに転化

教育工学的な観点から、学習の継続には適切なフィードバックとマイルストーンの設定が不可欠である。サイバー大学は、学修分野別の履修証明書をオープンバッジ¹⁾により付与することで、学習者の「獲得欲」を直接的な履修インセンティブへと転化させるシステムを構築した。

大学教育における「単位」は、学内での卒業要件としては機能するものの、学外、特に労働市場においてはその具体的な内容が不可視であることが多い。オープンバッジは、国際標準規格に基づいたメタデータを保持しているため、バッジ取得者がどのような知識を習得し、どのような評価基準をクリアしたかを、第三者が即座に検証することが可能である。この「可視化された資産」としてのバッジが、単なる「単位の積み上げ」という無機質な作業を、自身の学修ポートフォリオを構築するクリエイティブな活動へと変容させている。アンケート結果において、62.2%の学生が「科目を受講する意欲が向上する」と回答している事実は、このインセンティブ設計の有効性を如実に物語っている（後掲の図3参照）。

2.3. テクノロジーの進化と社会情勢の変化への即応

いわゆる情報化社会における情報技術の陳腐化は劇的に加速している。サイバー大学のMCは、包含される学修内容を随時更新し、バージョン管理を行う「ダイナミック（動的）」な設計を採用している点に大きな特徴がある。これは、一度取得すれば半永久的に効力を持ち内容が固定される「学位」や、静的な「マイクロディグリー」とは一線を画す概念である。

例えば、生成AIの急速な普及に伴い、2025年度からは「生成AI活用」分野の教育プログラムが追加され、客員教員としてシリコンバレーの起業家や技術者を招聘するなど、最先端の知見を即座にカリキュラムへと反映させた。しかし、学習者は、一度MCを取得した後も、社会情勢の変化に応じて更新される最新のMCを獲得するために、科目等履修生として学び続ける動機を持つことになる。このように、MCは単なる「修了証明」ではなく、学習者を生涯にわたる「知識やスキルのアップデート」へと誘う羅針盤として機能している。

3. サイバー大学のマイクロクレデンシャルの特徴と構成

3.1. MCの厳格な質保証とダイナミックな更新性

サイバー大学のMCは、その社会的価値を担保するために、厳格な質保証の枠組みに基づいている。MCの対象となるのは、大学または大学と共同で実施される学修成果の評価が行われた教育プログラムや科目のみに限定されている。これは、大学側が評価の実態

を把握できない外部の講座やセミナーへの参加、あるいは「学位」そのものの修了を MC の対象外とするという、明確な境界線に基づいている²⁾。

また、前述の通り、MC はバージョン管理が行われており、産業界のニーズや技術革新に合わせてその構成科目が動的に入れ替わる。この「ダイナミック MC」のモデルは、学修者が常に最新のスキルセットを証明できることを意味し、これが履歴書や SNS (LinkedIn 等) での学修歴証明としての実用性を高めている。2025 年 12 月現在、オープンバッジ 3.0³⁾ の普及により、分散型アイデンティティ (DID)⁴⁾ 技術を活用した真正性の証明が可能となり、サイバー大学の MC はこの最新の技術基盤に支えられている。

3.2. 階層化された積み上げ型構造

サイバー大学の MC は、学習の到達度と難易度を視覚的に明示するため、バッジの色による階層化 (Bronze、Silver、Gold、Platinum) を行っている。この積み上げ型 (スタッカブル) の構造は、学生が長期的な学習目標を見失わず、一歩ずつ専門性を深めていくためのガイドとなる (図 1、図 2)。

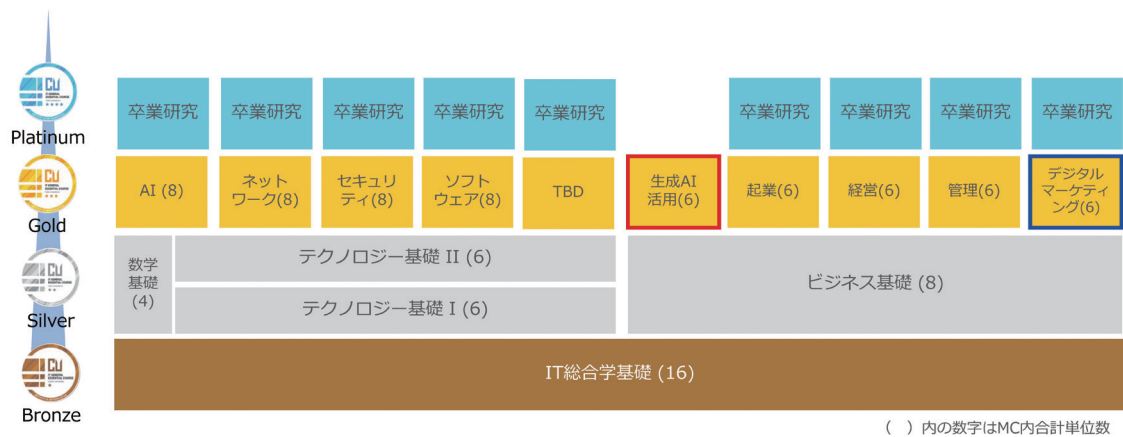


図 1 専門科目 MC とオープンバッジ構造

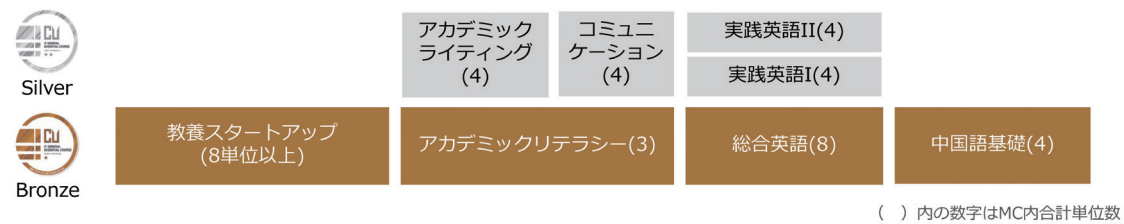


図 2 語学教養科目 MC とオープンバッジ構造

この構造において、各バッジの取得には指定されたすべての科目の単位修得が必須とされている。これにより、断片的なスキルの習得ではなく、大学教育としての体系性が維持されている。特に、卒業研究を Platinum バッジと位置づけることで、学位取得というマクロな目標と、個別のスキル習得というマイクロな目標が、一つの連続したパスとして統合されている。

3.3. リベラルアーツと専門教育の融合

サイバー大学の教育方針である「ビジネスのわかる IT エンジニア、IT のわかるビジネスパーソン」の育成を実現するため、MC はハードスキル（専門知識）だけでなく、ソフトスキル（リベラルアーツ）も包括している。

リベラルアーツ系 MC である「教養スタートアップ」は、人文科学、社会科学、自然科学、キャリアリテラシーの4分野、計69科目から構成される大規模なモジュールである。また、アカデミックリテラシー（スタディスキルやアカデミックライティングなど）や、グローバルコミュニケーションを支える英語・中国語のバッジも用意されている。これにより、学生はITやビジネスの専門性を深めると同時に、批判的思考力、創造力、コラボレーション能力といった、AI時代にこそ価値が増す汎用的な能力を証明可能な形で修得できる。

4. 学生による MC 制への反応

4.1. 在校生の意識変化と学習動機の変容

2024年6月に実施された在校生向けアンケート調査の結果は、MC制が学生の学修行動にポジティブな影響を与えていることを裏付けている（図3）。アンケートに回答したMC制が開始される以前に入学し、卒業までには時間がある在校生の74.4%はMCカリキュラムへ移行した理由として「オープンバッジを取得したかった」と回答している。またMC制への期待についても、62.2%の学生が「科目を受講する意欲が向上する」と前向きな姿勢の回答をしている。

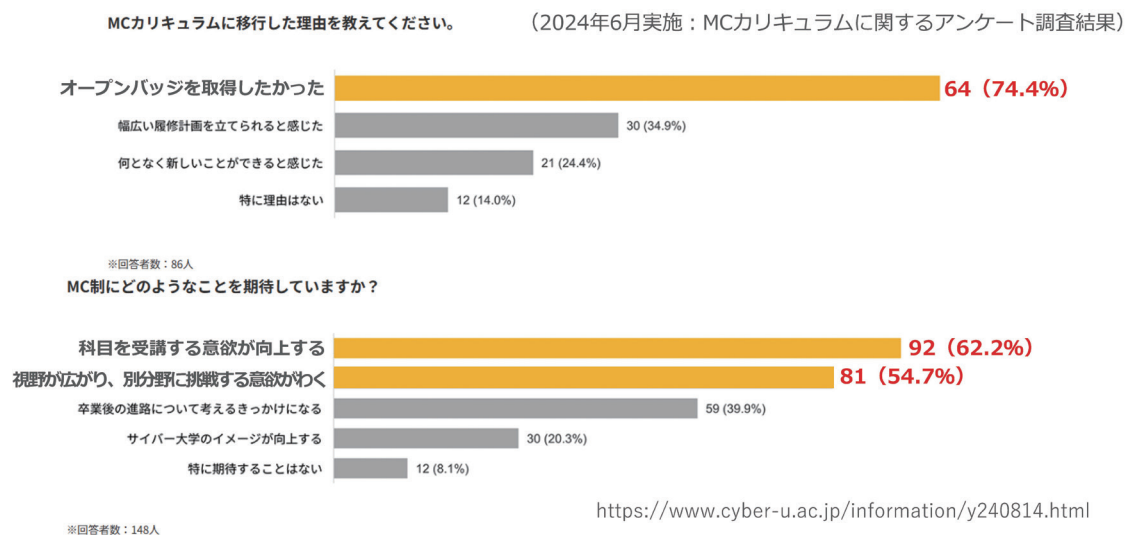


図3 MCに関する学生アンケート結果（一部）

これらのデータは、MCが単なる証明書の発行にとどまらず、学生の「探索的学習」を

促進していることを示唆している。特に 54.7% が「別分野への挑戦意欲」を挙げている点は、冒頭で述べた「専門性と多様性の両立」が、制度レベルだけでなく学生の意識レベルでも達成されつつあることを示している。

4.2. 科目等履修生および卒業生の再入学者数の著しい増加

MC 導入による最も顕著な定量的変化は、科目等履修生および卒業生の履修動向である。サイバー大学では、2024 年度の MC 全面移行に伴い、オープンバッジの獲得を目的とする在学中に未履修だった科目の単位を修得するために再入学する卒業生が急増した。以下の図 4 は、科目等履修生と卒業生科目等履修生の推移を示している。

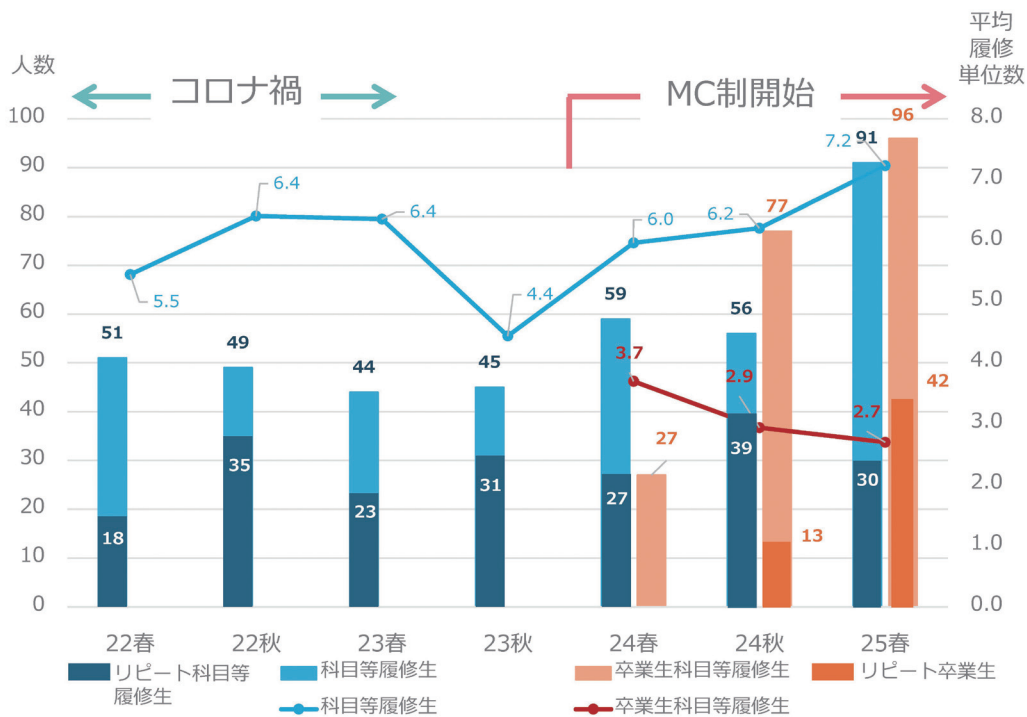


図 4 MC 導入前後の一般・卒業生科目等履修生数と平均履修単位数の推移

2024 年度 (MC 開始年度) より卒業生による履修者数が大幅に増加している

以前より卒業生が科目等履修生として再入学することはあったが、MC を開始した 2024 年度春学期より「卒業生向け科目等履修生受け入れ制度」⁵⁾ を開始したことで、2024 年度秋学期において、卒業生の再入学者数が一般の科目等履修生数を超え、2025 年度春学期には両者とも高い水準を維持している。特筆すべきは、科目等履修生 1 人あたりの平均履修単位数が 2022 年度春学期の 5.5 単位から 2025 年度春学期には 7.2 単位へと増加している。これは科目ごとの興味関心に基づく受講から、バッジ取得という体系的な目標に基づいた受講へと、社会人の意欲的な学習スタイルに変化したことを物語っている。

5. まとめと今後の挑戦

5.1. 教育モデルの根本的な転換：Degree から Competency へ

サイバー大学における MC 導入から2年間の軌跡は、高等教育が「学位 (Degree)」という一つの大きな証書を授与する場から、個々の「能力 (Competency)」を連続的に証明し、蓄積していくプラットフォームへと変容しつつあることを紹介した。特に卒業生の再入学の急増は、大学卒業資格が「4年後の到達点」ではなく、生涯にわたりスキルをアップデートし、その正当な証明 (オープンバッジ) を取得し続けるための「恒久的な学習拠点」となり得ることを示している。

オープンバッジは、学習者にとっての「収集の楽しみ」や「小刻みな達成感」という内発的動機付けを引き出すと同時に、労働市場における「スキルの可視化」という外発的価値を両立させる極めて有効なメディアとして機能している。これは、大学教育の質を卒業生の就職率というフローの指標だけでなく、卒業後の継続的な学習参加率というストックの指標で評価する新たな時代の幕開けと言える。

5.2. 今後の技術的・制度的課題

MC とオープンバッジの真の社会実装に向け、克服すべき課題も明確になりつつある。最も重要な課題は産業界による大学教育の評価である。MC が包含する学修歴が、企業の採用や人事評価、昇進において「共通の物差し」として機能するためには、大学側からの積極的な働きかけと、法人向け人材育成プログラムとしての認知獲得が不可欠である。

5.3. 未来への提言：継続学習のコミュニティとしての大学

サイバー大学の試みは、変化の激しい現代社会における「大学の在るべき姿」に対する一つのモデルを提示している。教育コンテンツの継続的な更新を行い、魅力的な MC を継続的に提案し続け、学生や卒業生からの学習要望を共有する「継続学習のコミュニティ」への移行である。

今後は、AI やデータサイエンスといった先端技術分野のみならず、人文知や社会実装力を含めた多様な MC の体系化をさらに進める必要がある。また、正科生、科目等履修生、卒業生、そして企業の従業員といった多様な属性の学習者が、それぞれのニーズに合わせて MC を組み合わせ、独自のキャリアを形成していく「スキル・エコシステム」の構築を目指すべきである。サイバー大学が先導したこのマイクロクレデンシャル・モデルが、日本の高等教育全体のデジタルトランスフォーメーション (DX) を加速させ、多くの国民が「継続学習」を日常的慣習として身に付け、その成果としての自己実現によって社会に寄与することを切望する。

注および参考文献

- 1) オープンバッジとは（一般社団法人 オープンバッジ・ネットワーク）
<https://www.openbadge.or.jp/about-ob/>（2026/2/1 参照）
- 2) サイバー大学における MC の定義
https://www.cyber-u.ac.jp/about/pdf/self-check/mc_basic_policy.pdf（2026/2/1 参照）
- 3) OpenBadge 3.0 <https://www.openbadge.or.jp/about-ob/index.html#ob3>（2026/2/1 参照）
- 4) 分散型アイデンティティ（DID: Decentralized Identity）とは、**特定の企業や政府に依存せず、個人が自身のデジタル ID（識別子）を主体的に作成・管理できる仕組み**で、ブロックチェーンなどの分散型技術で実現され、プライバシー保護とセキュリティ向上を目指す。従来の ID 管理（Google や Facebook など）は中央集権的で情報漏洩リスクがあるが、DID では**ユーザー自身が情報をコントロールし、必要な情報だけを提示できる**点が特徴である（自己主権型アイデンティティ：SSI）。
- 5) 卒業生向け科目等履修生受け入れ制度
https://www.cyber-u.ac.jp/support/grad_nondegree.html（2026/2/1 参照）